公開講演会
SPレコード音源鑑賞
15：00～15：30
芸術館

鈴木鼓村とSPレコード

本大会に先立って、シンポジウムに登壇される和田一久氏が所蔵する鈴木鼓村のSPレコードをお借りした。お借りした音盤の整理とデジタル化作業を行う中で出会ったのが、米国ビクターによる明治時代の出張録音の音盤である。

エジソンが実用的な録音機（蠟管）を発明したのは、1877（明治10）年である。以来、録音技術は驚異的な進化を遂げ、10年後に円盤式蓄音機が発明されて以降、平円盤（SPレコード）による商業レコードが制作されるようになった。

日本でも欧米の商業レコードを輸入販売する店が現れた。当初は欧米からの輸入盤を販売していたが、洋楽レコードだけでは売れ行きが伸びないことから始まったのが、出張録音による邦楽盤の制作である。つまり欧米から録音技師を派遣し、日本で録音したものを本国へ持ち帰り、本国でレコードにプレスして日本へ送り、販売された音盤である。最も古い出張録音は1903（明治36）年の英国グラモフォンによるものである。

これにやや遅れをとったのが米国ビクターである。管見の限りだが、米国ビクターの出張録音は3回行われており、うち初回は1907（明治40）年頃に大阪、東京、朝鮮半島で録音されているようである。鼓村は当時32 ,3歳で、大阪での録音に参加したと思われる。

これらの出張録音は、マイクロフォンが発明される以前のラッパ吹込みである。そのため、現在のクリアなデジタル音に慣れた耳には、ノイズの中に歌と箏の音が埋もれているように聞こえるかもしれない。しかし、国産のレーベルであるORIENTやNITTOなど、鼓村の他のレコードに比べても、ビクターの出張録音盤は音質やプレスのクオリティが高い。

収録順に音盤の番号が振られていると仮定して聞いていくと、鼓村と録音技師が試行錯誤を重ねて収録を進めていったであろうことが推測される。SPレコードは片面3分程度しか録音ができない。そのため、鼓村のレコードは、3分を超える曲については録音時間内に収めた短縮バージョンを2種類作っていたり、複数の音盤に分けて入れることを前提に、あらかじめ中断するポイントを決めて中断の仕方、再開の仕方を工夫したりしている。

大会当日は、鼓村の音盤と共に、宮城道雄の初期の音盤を聞き比べていただく予定である。二人が共に活躍した時代の音を、ぜひご堪能いただきたい。　（島添貴美子）

鈴木鼓村

写真提供　和田一久氏

宮城道雄

写真提供　宮城道雄記念館（同館所蔵）